

算数科“図形”領域教材研究——考察2(2)——

宮下英明

On “Informal Geometry” in Elementary School Mathematics — 2 (2)

Hideaki MIYASHITA

目次

4 変換(1)——点表現の枠の変換	
4.1 変換の概念——“点表現の枠の変換”と “絵の変換”	5.3 アフィン写像
4.2 線型空間と線型変換	5.3.1 アフィン写像の概念
4.2.1 基底の取り替え, 線型変換	5.3.2 アフィン写像の行列表現と, これを 用いた計算
4.2.2 変換の表現と変換の計算	5.3.3 アフィン写像のイメージ
4.3 アフィン空間とアフィン変換	5.3.4 アフィン写像の例
4.3.1 枠の取り替え, アフィン変換	
4.3.2 変換の表現と変換の計算	6 変換(2) —— 絵の変換
4.4 ユークリッド空間と等長変換	6.1 絵の変換
	6.1.1 絵の変換
5 写像	6.1.2 “絵の変換”と“枠の変換”の関係 の相対性
5.1 写像 = “絵の写像”	6.1.3 “枠の変換”で表現される“絵の変 換”
5.2 線型写像	6.2 線型変換
5.2.1 線型写像の概念	6.3 アフィン変換
5.2.2 線型写像の行列表現	
5.2.3 表現行列を用いた計算	
5.2.4 階数	
4 変換(1)——“点表現の枠の変換”	
4.1 変換の概念——“点表現の枠の変換”と “絵の変換”	
“変換”のことばは, 空間に関しては二通りの 解釈が可能である。一つは“点表現の枠の変 換”, そしてもう一つは“絵の変換”である。 “空間の変換”という言い回しがあるが, <u>文</u>	字通りのそれは, “或る空間の中の空間の変 換”でなければならない。実際, 変換する空間 のその変換が見えるためには, この変換の場と しての別の空間が要る。そしてこのときの“空 間の変換”は, “絵の変換”である。——“空 間Xにおける空間Yの変換”での空間Yの身分 (本質)は, (キャンバスとしての)空間Xの上 の絵。
	キャンバスである空間に対しては, “点表現 の枠の変換”と“絵の変換”の他に“空間の変

換”があるわけではない。“空間の変換”は“絵の変換”である。——繰り返すが、空間に関する“変換”のことばの解釈は“点表現の枠の変換”と“絵の変換”の二通りである。

本章ではこのうち“点表現の枠の変換”を主題化し、そして第6章で“絵の変換”を取り上げることにする。

4.2 線型空間と線型変換

4.2.1 基底の取り替え, 線型変換

線型空間の要素は、固定された一つの基底に対して表現される。したがって線型空間の場合、点表現の枠の変換は“基底の取り替え”の形で考えるのが自然である。この変換を線型変換と呼ぶ。

4.2.2 変換の表現と変換の計算

線型空間(D, K)の基底を (u_1, \dots, u_n) から (v_1, \dots, v_n) に変えることによって、 D の要素表現の変換がもたらされる。この変換の表現を問題にしよう。

自然な考え方は、

$$\begin{aligned} u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n \\ = v_{1 \times} \eta_1 + \dots + v_{n \times} \eta_n \end{aligned}$$

となる係数の組 $((\xi_1, \dots, \xi_n), (\eta_1, \dots, \eta_n)) \in K^n \times K^n$ 全体の集合として表現することである。変換は、このときグラフ

$$f \in K^n \times K^n$$

として表現される。

しかしこのグラフを実際につくることはできない。それは存在として想定されるのみであり、参照することはできない。この表現は現実的ではない。

われわれは変換の現実的な表現を知っている。それは

$$\begin{aligned} u_i = v_{1 \times} \alpha_{i1} + \dots + v_{n \times} \alpha_{in} \\ (i = 1, \dots, n) \end{aligned}$$

となる係数の組

$$((\alpha_{11}, \dots, \alpha_{1n}), \dots, (\alpha_{n1}, \dots, \alpha_{nm}))$$

である。実際、 D の各元は

$$u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n$$

の形に書けるわけであるから、変換の表現は、この係数の組の特定で十分ということになる。

係数の組 $((\alpha_{11}, \dots, \alpha_{1n}), \dots, (\alpha_{n1}, \dots, \alpha_{nm}))$ は、見易さおよび計算のし易さを考えて、行列

$$\begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix}$$

の形に書かれる。ここで“計算”とは、 $\xi_1, \dots, \xi_n \in K$ に対して

$$\begin{aligned} u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n \\ = v_{1 \times} \eta_1 + \dots + v_{n \times} \eta_n \end{aligned}$$

となる η_1, \dots, η_n を求める計算、および変換の合成を求める計算である。

先ず、

$$\begin{aligned} u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n \\ = (v_{1 \times} \alpha_{11} + \dots + v_{n \times} \alpha_{1n}) \times \xi_1 \\ + \dots \\ + (v_{1 \times} \alpha_{n1} + \dots + v_{n \times} \alpha_{nm}) \times \xi_n \\ = v_{1 \times} (\xi_1 \times \alpha_{11} + \dots + \xi_n \times \alpha_{n1}) \\ + \dots \\ + v_{n \times} (\xi_1 \times \alpha_{1n} + \dots + \xi_n \times \alpha_{nm}) \end{aligned}$$

よって、

$$u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n = v_{1 \times} \eta_1 + \dots + v_{n \times} \eta_n$$

のとき、

$$\begin{aligned} \eta_i = \xi_1 \times \alpha_{i1} + \dots + \xi_n \times \alpha_{in} \\ (i = 1, \dots, n) \end{aligned}$$

そこで周知の算法(行ベクトルに対する行列の作用)：

$$\begin{aligned} \left[(\xi_1 \dots \xi_n) \right] \begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \vdots & & \vdots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix} \\ = (\eta_1 \dots \eta_n) \end{aligned}$$

が定義される。

いま、もう一つの基底 (w_1, \dots, w_n) を考

え、基底 (v_1, \dots, v_n) を基底 (w_1, \dots, w_n) に取り替えることによる変換が行列

$$\begin{pmatrix} \beta_{11} & \dots & \beta_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \beta_{n1} & \dots & \beta_{nn} \end{pmatrix}$$

で表現されるとしよう。この変換を行列

$$\begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix}$$

で表現される先の変換に合成するときの変換は、基底 (u_1, \dots, u_n) を基底 (w_1, \dots, w_n) に取り替えることによる変換であるが、これの表現行列を

$$\begin{pmatrix} \gamma_{11} & \dots & \gamma_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \gamma_{n1} & \dots & \gamma_{nn} \end{pmatrix}$$

としよう。このとき

$$\begin{aligned} u_i &= v_{1 \times} \alpha_{i1} + \dots + v_{n \times} \alpha_{in} \\ &= (w_{1 \times} \beta_{11} + \dots + w_{n \times} \beta_{1n}) \times \alpha_{i1} \\ &\quad + \dots \\ &\quad + (w_{1 \times} \beta_{n1} + \dots + w_{n \times} \beta_{nn}) \times \alpha_{in} \\ &= w_{1 \times} (\alpha_{i1} \times \beta_{11} + \dots + \alpha_{in} \times \beta_{n1}) \\ &\quad + \dots \\ &\quad + w_{n \times} (\alpha_{i1} \times \beta_{1n} + \dots + \alpha_{in} \times \beta_{nn}) \end{aligned}$$

であるから、

$$\gamma_{ij} = \alpha_{i1} \times \beta_{1j} + \dots + \alpha_{in} \times \beta_{nj} \quad (i, j = 1, \dots, n)$$

そこで周知の算法（行列の乗法）：

$$\begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{i1} & \dots & \alpha_{in} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \beta_{11} & \dots & \beta_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \beta_{i1} & \dots & \beta_{in} \\ \dots & & \dots \\ \beta_{n1} & \dots & \beta_{nn} \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} \gamma_{11} & \dots & \gamma_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \gamma_{i1} & \dots & \gamma_{in} \\ \dots & & \dots \\ \gamma_{n1} & \dots & \gamma_{nn} \end{pmatrix}$$

が定義される。

4.3 アフィン空間とアフィン変換

4.3.1 枠の取り替え，アフィン変換

アフィン空間の要素は、固定された一つの枠（原点と基底の組）に対して表現される。したがってアフィン空間の場合、点表現の枠の変換は、“（アフィン）枠の取り替え”の形で考えるのが自然である。この変換をアフィン変換と呼ぶ。

4.3.2 変換の表現と変換の計算

アフィン空間 (E, D, K) の枠を $(O; u_1, \dots, u_n)$ から $(O'; v_1, \dots, v_n)$ に変えることによって、 E の要素表現の変換がもたらされる。この変換の表現を問題にしよう。

この枠の取り替えを

$$(O; u_1, \dots, u_n) \rightarrow (O'; u_1, \dots, u_n)$$

$$(O'; u_1, \dots, u_n) \rightarrow (O'; v_1, \dots, v_n)$$

の二段階で考えると、前者による変換は、

$$\overrightarrow{O'O} = v_{1 \times} \kappa_1 + \dots + v_{n \times} \kappa_n$$

を満たす $\kappa_j \in K$ ($j = 1, \dots, n$) で決まってしまう、後者による変換は

$$u_i = v_{1 \times} \alpha_{i1} + \dots + v_{n \times} \alpha_{in} \quad (i = 1, \dots, n)$$

を満たす $\alpha_{ij} \in K$ ($i, j = 1, \dots, n$) で決まってしまう。そこで、先の線型空間の場合に倣うならば、枠の変更：

$$(O; u_1, \dots, u_n) \rightarrow (O'; v_1, \dots, v_n)$$

による変換の表現として行列

$$\begin{pmatrix} \kappa_1 & \dots & \kappa_n \\ \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix}$$

を差し当たって考えることができる。——“差し当たって”の意味は、以下で明らかになる。

線型空間の場合、〈ベクトルの表現としての行ベクトル〉に〈変換の表現としての行列〉を作用させる形で、変換の計算ができた。では、これと同様のことがアフィン空間の場合にもできるかどうか（但しこのときの行ベクトルは点の座標としての行ベクトル）。そこでつぎに、これを考えてみよう。

まず、

$$X = O_+ x$$

$$x = u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n$$

に対し

$$X = O_+ x = (O' + \overrightarrow{O'O})_+ x$$

$$= O'_+ (\overrightarrow{O'O} + x)$$

ここで

$$\overrightarrow{O'O} + x = v_{1 \times} \eta_1 + \dots + v_{n \times} \eta_n$$

とすると

$$\eta_i = \kappa_i + \xi_i \times \alpha_{ii} + \dots + \xi_n \times \alpha_{ni}$$

$$(i = 1, \dots, n)$$

この結果を行ベクトル $(\xi_1 \dots \xi_n)$ に対する行列

$$\begin{pmatrix} \kappa_1 & \dots & \kappa_n \\ \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & \dots & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix}$$

の作用の計算で得ようとするならば、

$$(\xi_1 \dots \xi_n) \longrightarrow (1 \xi_1 \dots \xi_n)$$

$$(\eta_1 \dots \eta_n) \longrightarrow (1 \eta_1 \dots \eta_n)$$

$$\begin{pmatrix} \kappa_1 & \dots & \kappa_n \\ \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & \dots & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix} \longrightarrow A = \begin{pmatrix} 1 & \kappa_1 & \dots & \kappa_n \\ 0 & \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ 0 & \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix}$$

の読み換えが必要になる。

つぎに、枠の変更

$$(O ; u_1, \dots, u_n) \longrightarrow (O' ; v_1, \dots, v_n)$$

$$(O' ; v_1, \dots, v_n) \longrightarrow (O'' ; w_1, \dots, w_n)$$

に対応する変換の合成を考えてみる。後者の変

換の表現行列を

$$B = \begin{pmatrix} 1 & \lambda_1 & \dots & \lambda_n \\ 0 & \beta_{11} & \dots & \beta_{1n} \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ 0 & \beta_{n1} & \dots & \beta_{nn} \end{pmatrix}$$

とすると、

$$\overrightarrow{O''O} = \overrightarrow{O''O'} + \overrightarrow{O'O}$$

$$= w_{1 \times} \lambda_1 + \dots + w_{n \times} \lambda_n$$

$$+ (w_{1 \times} \beta_{11} + \dots + w_{n \times} \beta_{1n}) \times \kappa_1$$

$$+ \dots$$

$$+ (w_{1 \times} \beta_{n1} + \dots + w_{n \times} \beta_{nn}) \times \kappa_n$$

$$= w_{1 \times} (\lambda_1 + \kappa_1 \times \beta_{11} + \dots + \kappa_n \times \beta_{n1})$$

$$+ \dots$$

$$+ w_{n \times} (\lambda_n + \kappa_1 \times \beta_{1n} + \dots + \kappa_n \times \beta_{nn}),$$

$$u_i = (w_{1 \times} \beta_{i1} + \dots + w_{n \times} \beta_{in}) \times \alpha_{ii}$$

$$+ \dots$$

$$+ (w_{1 \times} \beta_{ni} + \dots + w_{n \times} \beta_{nn}) \times \alpha_{in}$$

$$= w_{1 \times} (\alpha_{ii} \times \beta_{i1} + \dots + \alpha_{in} \times \beta_{ni})$$

$$+ \dots$$

$$+ w_{n \times} (\alpha_{ii} \times \beta_{in} + \dots + \alpha_{in} \times \beta_{nn}).$$

そこで変換の合成の表現行列を

$$C = \begin{pmatrix} 1 & \mu_1 & \dots & \mu_n \\ 0 & \gamma_{11} & \dots & \gamma_{1n} \\ \dots & \dots & \dots & \dots \\ 0 & \gamma_{n1} & \dots & \gamma_{nn} \end{pmatrix}$$

とすると、

$$\mu_j = \lambda_j + \kappa_1 \times \beta_{1j} + \dots + \kappa_n \times \beta_{nj}$$

$$\gamma_{ij} = \alpha_{ii} \times \beta_{ij} + \dots + \alpha_{in} \times \beta_{nj}$$

$$(i, j = 1, \dots, n)$$

そしてこの結果は、行列AとBの積をCとおいたときの結果と一致する。

4.4 ユークリッド空間と等長変換

計量形式が与えられているアフィン空間としてのユークリッド空間に対し、これの“点表現の枠の変換”として自然に考えられるものは、計量を変えないアフィン変換としての“等長変

換”である。

ユークリッド空間の計量——ユークリッド計量—— Q は、正規直交基底 $\{u_1, \dots, u_n\}$ に対し

$$Q(u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n) = \xi_1^2 + \dots + \xi_n^2$$

で定義される（正確には、ユークリッド計量と正規直交基底は、相互依存する概念として同時に定義される）（§3.5）。そこで、等長変換の定義はつぎのようになる。

即ち、アフィン変換は、正規直交基底 $\{u_1, \dots, u_n\}$ を任意の一つ固定して

$$(O; u_1, \dots, u_n) \rightarrow (O'; v_1, \dots, v_n)$$

と表わせるが、このとき

$$Q(v_{1 \times} \xi_1 + \dots + v_{n \times} \xi_n) = \xi_1^2 + \dots + \xi_n^2 \quad (\xi_1, \dots, \xi_n \in \mathbb{R})$$

であれば、等長変換。

いま

$$u_i = v_{1 \times} \alpha_{i1} + \dots + v_{n \times} \alpha_{in}$$

とすると、等長変換の条件から

$$Q(u_i) = \alpha_{i1}^2 + \dots + \alpha_{in}^2, \\ B(u_i, u_j) = Q(u_i + u_j) - Q(u_i) - Q(u_j) = 2(\alpha_{i1}\alpha_{j1} + \dots + \alpha_{in}\alpha_{jn})$$

（ここで B は、 Q に随伴する双線型形式）。したがって、 $\{u_1, \dots, u_n\}$ が正規直交基底であるための条件の

$$Q(u_i) = 1, B(u_i, u_j) = 0 \quad (i \neq j)$$

は、

$$\alpha_{i1}^2 + \dots + \alpha_{in}^2 = 1, \\ \alpha_{i1}\alpha_{j1} + \dots + \alpha_{in}\alpha_{jn} = 0 \quad (i \neq j)$$

と言い換えられる。そしてさらに行列

$$\begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix}$$

を A とおくと、この条件は、 $A'A = 1$ （単位行列）、即ち $A = A^{-1}$ —— A は直交行列——と同じである。特にこれから、 $\{v_1, \dots, v_n\}$ も正規直交基底であることがわかる^(註)。

こうして、等長変換は、正規直交基底を保存する変換として特徴づけられることになる。ま

た、直交行列は、等長変換の表現行列として特徴づけられる。

（註） 実際、 $Q(v_i) = Q(v_{1 \times} 0 + \dots + v_{i \times} 1 + \dots + v_{n \times} 0) = 0^2 + \dots + 1^2 + \dots + 0^2 = 1$ 。また、 $A^{-1} = A$ より、

$$v_i = u_{1 \times} \alpha_{i1} + \dots + u_{n \times} \alpha_{in},$$

そして $AA = 1$ より、

$$B(v_i, v_j) = \alpha_{i1}\alpha_{j1} + \dots + \alpha_{in}\alpha_{jn} = 0 \quad (i \neq j)$$

5 写像

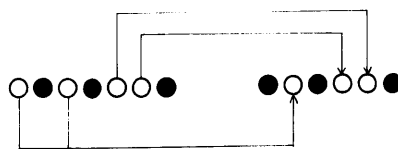
5.1 写像 = “絵の写像”

写像とは、絵の写像のことである。

キャンバスである空間の比喩として“電光掲示板”（§2.2.1）を用いるとき、絵の写像は、一方の電光掲示板 \mathcal{X} の絵 \mathcal{P} （発光している電球の集合）をもう一方の電光掲示板 \mathcal{Y} に写すことである。

このときの“写す”には、“模写”の意味はない。単に、 \mathcal{X} の発光している各電球に対して \mathcal{Y} の或る電球を発光させることが、“写す”である。ここでの“写す”には、“似せる”という意味合いはない。

例えば、“写す”が



である場合、 \mathcal{X} 、 \mathcal{Y} の要素をそれぞれ左から順に

$$X_1, X_2, X_3, X_4, X_5, X_6, X_7 \\ Y_1, Y_2, Y_3, Y_4, Y_5, Y_6$$

と命名すれば、絵 \mathcal{P} は \mathcal{X} の部分

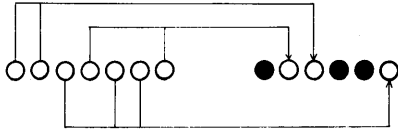
$$\{X_1, X_3, X_5, X_6\}$$

のこととなり、“写す”は対応：

$$f = \{(X_1, Y_2), (X_3, Y_2), (X_5, Y_4), (X_6, Y_5)\}; \\ \mathcal{P} \rightarrow \mathcal{Y}$$

のこととなる。

“空間の写像”という言い回しがあるが、文字通りのそれは、空間をそれ自身の上の絵と読み直すときのこれの写像である：



絵の写像の他に“空間の写像”があるのではない。“空間の写像”は絵の写像である。——繰り返すが、写像とは絵の写像のことである。

空間 X の上の絵 \mathcal{P} の写像を、空間 X の写像(X をそれ自身の上の絵と読み直すときのこれの写像)に埋め込んで考える場合がある。このとき、 \mathcal{P} の写像は、 X の写像の \mathcal{P} への制限という形で捉えられるようになる。

5.2 線型写像

5.2.1 線型写像の概念

“線型写像”は、“比例関数”の概念の拡張である。

比例関数は、 K が実数体 \mathbb{R} あるいは有理数体 \mathbb{Q} であるときの1次元線型空間 (D, K) 、 (D', K) に対する関数 $f: D \rightarrow D'$ で、条件：

$$f(x \times \xi) = f(x) \times \xi \quad (\text{註1})$$

を満たすもの、というように定式化できる。実際、比例関数が量と量の間で考えられているとき、量は実数体あるいは有理数体上の1次元線型空間として効いている。また、比例関数が実数と実数、あるいは有理数と有理数の間で考えられているとき、実数は(1次元)線型空間としての $((\mathbb{R}, +), (\mathbb{R}, +, \times), \times)$ の第1因子の方の \mathbb{R} の要素として、同様に有理数は(1次元)線型空間としての $((\mathbb{Q}, +), (\mathbb{Q}, +, \times), \times)$ の第1因子の方の \mathbb{Q} の要素として、それぞれ実効している^(註2)。

“比例関数”の“線型写像”への拡張は、係数体および次元の一般化である。そして、“線型写像”へと引き継ぐものは、比例関数の形式としての

$$f(x \times \xi) = f(x) \times \xi$$

と、比例関数の価値としての

《単位の写る先がわかれば全ての要素の写る先がわかる》

である。

次元の一般化で、“単位”は“基底”の概念へと拡張される。そこで、価値の方は、

《基底の要素の写る先がわかれば全ての要素の写る先がわかる》

のようになる。しかしこの価値の実現のためには、形式

$$f(x \times \xi) = f(x) \times \xi$$

だけでは足りない。この事態は、形式

$$f(x+y) = f(x) + f(y)$$

を加えることで解決される。実際、この手続きは、“線型写像”を比例関数に対して別モノ化するものではない。何故なら比例関数の場合、“ $f(x+y) = f(x) + f(y)$ ”は“ $f(x \times \xi) = f(x) \times \xi$ ”の含意になっているからである^(註3)。

こうして、“比例関数”の拡張としての“線型写像”は、条件

$$f(x \times \xi) = f(x) \times \xi$$

$$f(x+y) = f(x) + f(y)$$

を満たす写像 $f: D \rightarrow D'$ として定義されることになる。

(註1) 小学校算数では、これを“一方が2倍、3倍、……になるときもう一方も2倍、3倍、……になる”という言い回しで指導している。

(註2) 一般に、体 $(K, +, \times)$ からは、1次元線型空間 $((K, +), (K, +, \times), \times)$ が導かれる。——体 $(K, +, \times)$ から群 $(K, +)$ を分離し、乗法 \times によって群 $(K, +)$ の要素に対する体 $(K, +, \times)$ の要素の作用を定義する。

(註3) $x = u \times \xi, y = u \times \eta$ とすると、
 $f(x+y) = f(u \times (\xi + \eta)) = f(u) \times (\xi + \eta)$
 $= f(u) \times \xi + f(u) \times \eta = f(u \times \xi) + f(u \times \eta)$
 $= f(x) + f(y)$

5.2.2 線型写像の行列表現

$(u_1, \dots, u_n), (v_1, \dots, v_m)$ がそれぞれ線型空間 $(D, K), (D', K)$ の基底であるとき、線型写像 $f: D \rightarrow D'$ は

$$f(u_i) \quad (i=1, \dots, n)$$

で決まってしまう^(註)。そこでさらに

$$f(u_i) = v_1 \times \alpha_{i1} + \dots + v_m \times \alpha_{im} \quad (i=1, \dots, n)$$

のように表わすと、係数

$$\alpha_{ij} \quad (i=1, \dots, n; j=1, \dots, m)$$

が f を決定するものになる。われわれは係数 α_{ij} の組を行列

$$\begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1m} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix}$$

の形に書いて、これを f の表現——“表現行列”——として用いている。

“線型写像”が“比例関数”の概念の拡張であるのに対応して、“表現行列”は、“比例定数”の概念の拡張である。実際、“1次元実線型空間から1次元実線型空間への線型写像”である“比例関数”の表現行列は (1×1) 行列になるが、これの(唯一の)要素が“比例定数”である。

(註) 実際、 D の元は $u_1 \times \xi_1 + \dots + u_n \times \xi_n$ の形に書いて、さらに線型写像の条件から $f(u_1 \times \xi_1 + \dots + u_n \times \xi_n) = f(u_1) \times \xi_1 + \dots + f(u_n) \times \xi_n$ 。

5.2.3 表現行列を用いた計算

$(D, K), (D', K)$ を同一係数体上の線型空間とし、 $f: D \rightarrow D'$ を線型写像とする。

いま、線型空間 $(D, K), (D', K)$ のそれぞれに、基底 $(u_1, \dots, u_n), (v_1, \dots, v_m)$ を導入する。そしてこれに対する f の表現行列を

$$\begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1m} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix}$$

とする。このとき、 D の要素

$$x = u_1 \times \xi_1 + \dots + u_n \times \xi_n$$

に対し、

$$\begin{aligned} f(x) &= f(u_1) \times \xi_1 + \dots + f(u_n) \times \xi_n \\ &= v_1 \times (\xi_1 \times \alpha_{11} + \dots + \xi_n \times \alpha_{n1}) \\ &+ \dots \end{aligned}$$

$$+ v_m \times (\xi_1 \times \alpha_{1m} + \dots + \xi_n \times \alpha_{nm})$$

したがって $f(x)$ が、 x を表わす行ベクトルに f の表現行列を右から作用させる計算 (§ 4.2.2) によって、求められることになる。

つぎに、 (D'', K) をもう一つの線型空間として、 f と線型写像 $g: D' \rightarrow D''$ の合成を考える。

線型空間 (D'', K) に、基底 (w_1, \dots, w_p) を導入する。基底 $(v_1, \dots, v_m), (w_1, \dots, w_p)$ に対する g の表現行列を

$$\begin{pmatrix} \beta_{11} & \dots & \beta_{1p} \\ \dots & & \dots \\ \beta_{m1} & \dots & \beta_{mp} \end{pmatrix}$$

とすると、

$$\begin{aligned} g(f(u_i)) &= g(v_1) \times \alpha_{i1} + \dots + g(v_m) \times \alpha_{im} \\ &= (w_1 \times \beta_{11} + \dots + w_p \times \beta_{1p}) \times \alpha_{i1} \\ &+ \dots \end{aligned}$$

$$+ (w_1 \times \beta_{m1} + \dots + w_p \times \beta_{mp}) \times \alpha_{im}$$

$$= w_1 \times (\alpha_{i1} \times \beta_{11} + \dots + \alpha_{im} \times \beta_{m1})$$

$$+ \dots$$

$$+ w_p \times (\alpha_{i1} \times \beta_{1p} + \dots + \alpha_{im} \times \beta_{mp})$$

そこで f と g の合成の表現行列を

$$\begin{pmatrix} \gamma_{11} & \dots & \gamma_{1p} \\ \dots & & \dots \\ \gamma_{n1} & \dots & \gamma_{np} \end{pmatrix}$$

とおくと、

$$\gamma_{ij} = \alpha_{i1} \times \beta_{1j} + \dots + \alpha_{im} \times \beta_{mj}$$

$$(i=1, \dots, n; j=1, \dots, p)$$

よって線型写像の合成が、表現行列の積 (§ 4.2.2) で計算できることになる。

5.3 アフィン写像

5.3.1 アフィン写像の概念

$(E, D, K), (E', D', K)$ を同一係数体上のアフィン空間とする。写像 $F: E \rightarrow E'$ は、条件:

$$\begin{aligned} \text{任意の } O \in E \text{ に対し,} \\ f: \overrightarrow{OX} \mapsto \overrightarrow{F(O)F(X)}; \\ D \longrightarrow D' \end{aligned}$$

は線型写像。

を満たすとき、アフィン写像と呼ばれる。

線型写像 f は $O \in E$ のとり方に依らずに一意に決まる^(註1)。 f はアフィン写像 F に随伴すると言われる。

アフィン写像 $F: E \rightarrow E'$ は、或る線型写像 $f: D \rightarrow D'$ に対し

$$\begin{aligned} F(X+x) = F(X) + f(x) \\ (X \in E, x \in D) \end{aligned}$$

が成り立つ写像と定義しても同じであり、そして f も、 F に随伴する線型写像と一致する^(註2)。

(註1) $O' \in E$ に対し定義される線型写像: $\overrightarrow{O'X'} \mapsto \overrightarrow{F(O')F(X')}$ が f と一致することを示す。 $\overrightarrow{OX} = \overrightarrow{O'X'}$ から $\overrightarrow{F(O)F(X)} = \overrightarrow{F(O')F(X')}$ が導かれることを言えばよい。

まず、 $\overrightarrow{OX} = \overrightarrow{O'X'}$ と $\overrightarrow{OX} + \overrightarrow{XX'} = \overrightarrow{OX'} = \overrightarrow{OO'} + \overrightarrow{O'X'}$ より $\overrightarrow{XX'} = \overrightarrow{OO'}$ 。そして、
 $F(X') = F(O) + \overrightarrow{F(O)F(X')}$
 $= F(O) + f(\overrightarrow{XX'}) + f(\overrightarrow{OX})$
 $= (F(O) + f(\overrightarrow{OO'})) + f(\overrightarrow{OX})$
 $= (F(O) + \overrightarrow{F(O)F(O')}) + \overrightarrow{F(O)F(X)}$
 $= F(O') + \overrightarrow{F(O)F(X)}$
 即ち、 $\overrightarrow{F(O)F(X)} = \overrightarrow{F(O')F(X')}$ 。

(註2) $O \in E$ に対し、 $F(X) = F(O) + \overrightarrow{F(O)F(X)} = F(O) + f(\overrightarrow{OX})$ 、よって $f(\overrightarrow{OX}) = \overrightarrow{F(O)F(X)}$ 。

5.3.2 アフィン写像の行列表現と、これを用いた計算

$(E, D, K), (E', D', K)$ を同一係数体上のアフィン空間、 $F: E \rightarrow E'$ をアフィン写像、そして $f: D \rightarrow D'$ を F に随伴する線型写像とする。

いま、アフィン空間 $(E, D, K), (E', D', K)$ のそれぞれに、枠 $(O; u_1, \dots, u_n)$ 、 $(O'; v_1, \dots, v_m)$ を導入する。

E の各点

$$X = O + (u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n)$$

に対し、

$$\begin{aligned} F(X) &= F(O) + f(u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n) \\ &= F(O) + (f(u_{1 \times}) \times \xi_1 + \dots + f(u_{n \times}) \times \xi_n) \end{aligned}$$

よって F は、 $F(O)$ と $f(u_i)$ ($i = 1, \dots, n$) で決まる。 $f(u_i)$ ($i = 1, \dots, n$) をわれわれは、“基底 (u_1, \dots, u_n) 、 (v_1, \dots, v_m) に対する f の表現行列” で定めている。したがって F は、

$$F(O) = O' + (v_{1 \times} \kappa_1 + \dots + v_{m \times} \kappa_m)$$

である κ_j の組 $(\kappa_1, \dots, \kappa_m)$ と f の表現行列

$$\begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{m1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix}$$

の組で表現される。いまこれを

$$+ \begin{pmatrix} \kappa_1 & \dots & \kappa_m \\ \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{m1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix}$$

のように書いておく。

$$\begin{aligned} \text{このとき } F(X) &\text{は,} \\ &= O' + ((v_{1 \times} \kappa_1 + \dots + v_{m \times} \kappa_m) \\ &+ v_{1 \times} (\xi_1 \times \alpha_{11} + \dots + \xi_n \times \alpha_{n1}) \\ &+ \dots \\ &+ v_{m \times} (\xi_1 \times \alpha_{m1} + \dots + \xi_n \times \alpha_{nm})) \\ &= O' + (\\ &\quad v_{1 \times} (\kappa_1 + \xi_1 \times \alpha_{11} + \dots + \xi_n \times \alpha_{n1}) \end{aligned}$$

+……
 $+v_{m \times}(\kappa_m + \xi_1 \times \alpha_{1m} + \dots + \xi_n \times \alpha_{nm})$
 そしてこの結果は、
 $(\xi_1, \dots, \xi_n) \longrightarrow (1 \xi_1, \dots, \xi_n)$

$$\begin{pmatrix} \kappa_1 & \dots & \kappa_m \\ \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1m} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix} \longrightarrow A = \begin{pmatrix} 1 & \kappa_1 & \dots & \kappa_m \\ 0 & \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1m} \\ \dots & & & \dots \\ 0 & \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix}$$

の読み換えをすることで、 X の座標を表わす行ベクトルに対する行列の作用の計算で得られる：

$$(1 \xi_1, \dots, \xi_n) \begin{pmatrix} 1 & \kappa_1 & \dots & \kappa_m \\ 0 & \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1m} \\ \dots & & & \dots \\ 0 & \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix}$$

つぎに、 (E'', D'', K) をもう一つのアフィン空間として、 F とアフィン写像 $G: E' \longrightarrow E''$ の合成を考えよう。 G に随伴する線型写像を $g: D' \longrightarrow D''$ とする。

アフィン空間 (E'', D'', K) に、枠 $(O'' ; w_1, \dots, w_p)$ を導入する。枠 $(O' ; v_1, \dots, v_m), (O'' ; w_1, \dots, w_p)$ に対する G の表現行列を

$$B = \begin{pmatrix} 1 & \lambda_1 & \dots & \lambda_p \\ 0 & \beta_{11} & \dots & \beta_{1p} \\ \dots & & & \dots \\ 0 & \beta_{m1} & \dots & \beta_{mp} \end{pmatrix}$$

とするとき、
 $G(F(O)) = G(O') + (v_{1 \times} \kappa_1 + \dots + v_{m \times} \kappa_m)$
 $= G(O') + (g(v_1) \times \kappa_1 + \dots + g(v_m) \times \kappa_m)$
 $= O'' + ((w_{1 \times} \lambda_1 + \dots + w_{p \times} \lambda_p)$
 $+ (w_{1 \times} \beta_{11} + \dots + w_{p \times} \beta_{1p}) \times \kappa_1$
 $+ \dots$
 $+ (w_{1 \times} \beta_{m1} + \dots + w_{p \times} \beta_{mp}) \times \kappa_m$
 $= O'' +$

$(w_{1 \times} (\lambda_1 + \kappa_1 \times \beta_{11} + \dots + \kappa_m \times \beta_{m1})$
 $+ \dots$
 $+ w_{p \times} (\lambda_p + \kappa_1 \times \beta_{1p} + \dots + \kappa_m \times \beta_{mp}))$
 $g(f(u_i))$
 $= w_{1 \times} (\alpha_{i1} \times \beta_{11} + \dots + \alpha_{im} \times \beta_{m1})$
 $+ \dots$
 $+ w_{p \times} (\alpha_{ip} \times \beta_{1p} + \dots + \alpha_{im} \times \beta_{mp})$
 そこで変換の合成の表現行列を

$$C = \begin{pmatrix} 1 & \mu_1 & \dots & \mu_p \\ 0 & \gamma_{11} & \dots & \gamma_{1p} \\ \dots & & & \dots \\ 0 & \gamma_{n1} & \dots & \gamma_{np} \end{pmatrix}$$

とおくと、
 $\mu_j = \lambda_j + \kappa_1 \times \beta_{1j} + \dots + \kappa_m \times \beta_{mj}$
 $\gamma_{ij} = \alpha_{i1} \times \beta_{1j} + \dots + \alpha_{im} \times \beta_{mj}$
 $(i = 1, \dots, n; j = 1, \dots, p)$
 そしてこの結果は、行列 A と B の積を C とおいたときの結果と一致する。

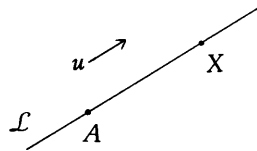
5.3.3 アフィン写像のイメージ

アフィン写像では、直線が保存される。

\mathcal{L} をアフィン空間 (E, D, K) 中の直線として、 \mathcal{L} の上的一点 A を固定する。 \mathcal{L} は或る $u \in D$ (“ \mathcal{L} の方向ベクトル”) に対し、 ξ が K 全体を動くときの点

$$X = A + u \times \xi$$

の全体と一致する：



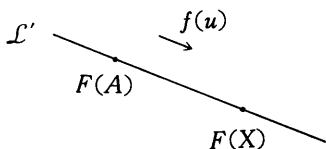
F をアフィン空間 (E, D, K) からアフィン空間 (E', D', K) へのアフィン写像、 f を F に随伴する線型写像とすると、点 $X = A + u \times \xi$ に対し、

$$F(X) = F(A) + f(u) \times \xi$$

よって、

$$\mathcal{L}' = \{F(A) + f(u) \times \xi \mid \xi \in K\}$$

が、 F による \mathcal{L} の像。そして $f(u) \neq 0$ ならば、 \mathcal{L}' は直線：



また、 $f(u) = 0$ のとき \mathcal{L}' は点 $F(A)$ であり、 F によって \mathcal{L} が一点に“退化”していることになる。

式 $F(X) = F(A) + f(u) \times \xi$ はまた、方向ベクトル u の直線が F によって方向ベクトル $f(u)$ の直線にうつることを示している(但し、 $f(u) \neq 0$ の場合)。したがって特に、 F が直線の平行関係を保存することが結論される。

さらに、直線 \mathcal{L} が F によって直線 \mathcal{L}' にうつるとき、 \mathcal{L} 上の異なる三点 A, B, C に対し、 $\overrightarrow{AB} \times \xi = \overrightarrow{AC}$

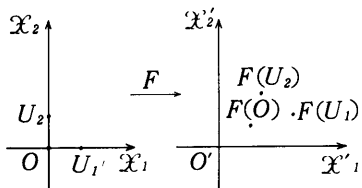
$$\Rightarrow \overrightarrow{F(A)F(B)} \times \xi = \overrightarrow{F(A)F(C)}$$

即ち、

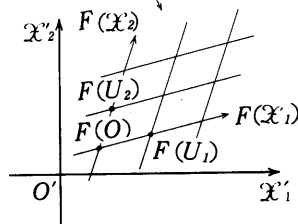
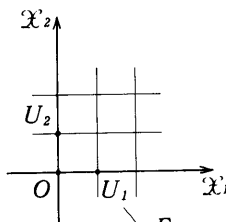
$$\overrightarrow{AB} : \overrightarrow{AC} = \overrightarrow{F(A)F(B)} : \overrightarrow{F(A)F(C)}$$

となる。

そこで以上の性質から、写像 F は、 E のアフィン枠 $(O; U_1, \dots, U_n)$ を成す点 O, U_1, \dots, U_n (§3.3.4.1)がそれぞれどこにうつるかということで、捉えられるようになる。例えば $n = 2$ の場合、 $F(O), F(U_1), F(U_2)$ の定位



から、 F の表現(メッシュの写像として表わすことによる F の視覚化)：



が引き出せる。

さらに、写像 F のこの図表示からは、 F の表現行列を直接得ることができる。また逆に、 F の表現行列から F の図表示が直接得られる。実際、 (E', D', K) に枠 $(O'; V_1, \dots, V_m)$ をとるとき、枠 $(O; U_1, \dots, U_n), (O'; V_1, \dots, V_m)$ に対する F の表現行列

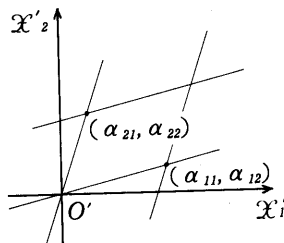
$$\begin{pmatrix} 1 & \kappa_1 & \dots & \kappa_m \\ 0 & \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1m} \\ & & \dots & \\ 0 & \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nm} \end{pmatrix}$$

と F の図表示は、つぎのような具合に対応している($n = m = 2$ の場合)：

$$\begin{aligned} O(0, 0) &\longrightarrow (\kappa_1, \kappa_2) \\ U_1(1, 0) &\longrightarrow (\kappa_1 + \alpha_{11}, \alpha_{21}) \\ U_2(0, 1) &\longrightarrow (\alpha_{21}, \kappa_2 + \alpha_{22}) \end{aligned}$$

即ち、軸 X'_1 上の目盛り1の点がつった先の点の j 座標が、 $\kappa_j + \alpha_{ij}$ ということである。

特に、 O' として $F(O)$ をとれば、



(註) $\overrightarrow{F(A)F(B)} \times \xi = f(\overrightarrow{AB}) \times \xi = f(\overrightarrow{AB} \times \xi) = f(\overrightarrow{AC}) = \overrightarrow{F(A)F(C)}$.

5.3.4 アフィン写像の例

算数. 数学科で主題になる“図形”の“移動”や“変形”は、アフィン写像の概念を以って定式化できる。——逆に言えば、算数. 数学科は、“移動”、“変形”のうち、アフィン写像の概念に定式化できるようなものを取り上げる。

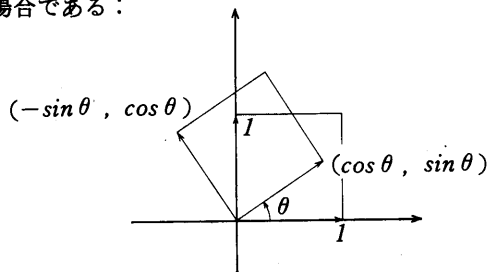
(E, D, \mathbb{R}) を2次元ユークリッド空間、($O; u, v$) を正規直交基底 $\{u, v\}$ に対する枠、そして \mathcal{X}, \mathcal{Y} をこの枠に対する二つの座標軸とする。以下、“図形”の“移動”・“変形”に対しての、アフィン写像 $F: E \rightarrow E$ とそれに随伴する線型写像 $f: D \rightarrow D$ による解釈を示す。

まず、 $F(O) = O$ の場合の例から。

例1. O のまわりの回転角 θ の回転は、 f の表現行列が

$$\begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

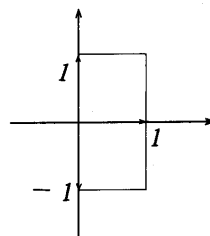
の場合である：



例2. O を通る直線 \mathcal{L} に関する対称移動は、 \mathcal{X} 軸に対する \mathcal{L} の傾きが θ のとき、 O のまわりの $-\theta$ の回転と、 \mathcal{X} 軸に関する対称移動と、 O のまわりの θ の回転の合成になる。ここで、 x 軸に関する対称移動は、 f の表現行列が

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$$

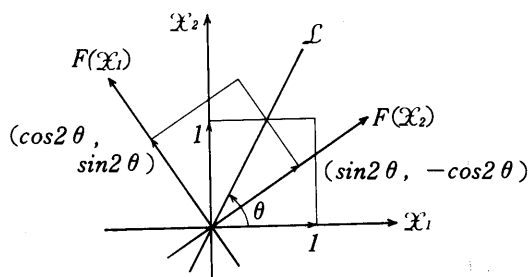
の場合である：



したがって、直線 \mathcal{L} に関する対称移動は、 f の表現行列が積

$$\begin{pmatrix} \cos(-\theta) & \sin(-\theta) \\ -\sin(-\theta) & \cos(-\theta) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos 2\theta & \sin 2\theta \\ \sin 2\theta & -\cos 2\theta \end{pmatrix}$$

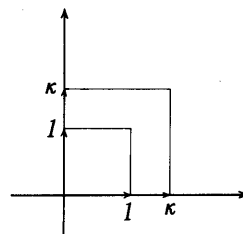
の場合である。



例3. O を中心とする相似比 κ の相似拡大は、 f の行列表現が

$$\begin{pmatrix} \kappa & 0 \\ 0 & \kappa \end{pmatrix}$$

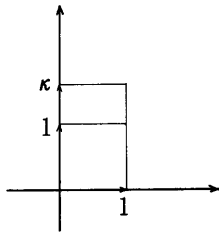
の場合である：



例4. 相似拡大は、 \mathcal{X} 軸と \mathcal{Y} 軸の両方向への κ 倍の拡大というように規定できるが、 \mathcal{X} 軸方向はそのままにして \mathcal{Y} 軸方向のみを κ 倍に拡大することを考えるとき、“ひずみ変換”の概念が起こる。これは f の表現行列が、

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & \kappa \end{pmatrix}$$

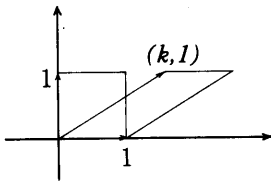
の場合である：



例5. 傾き $1/\kappa$ の直線の上に Q 軸を X 軸に平行にずらす変換として，“ずらし変換”が定義される。これは， f の表現行列が

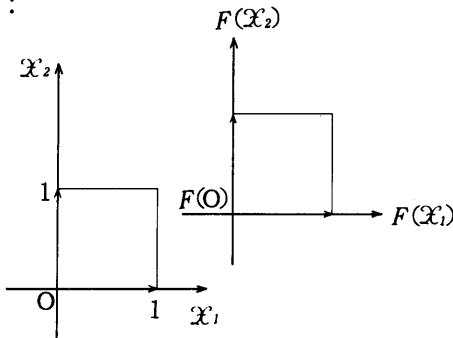
$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ \kappa & 1 \end{pmatrix}$$

の場合である：



算数・数学科の教材には，以上の“移動”，“変形”の他に，“平行移動”が登場する。“平行移動”の場合には，条件“ $F(O)=O$ ”を外す。

例6. “平行移動”は， f が恒等写像の場合である：



6 変換(2)——絵の変換

6.1 絵の変換

6.1.1 絵の変換

同じ空間（キャンパス）の上の絵の写像を，特に，変換と呼ぶことにする。

“絵の写像”の特殊としての“絵の変換”に

ついて主題となるものは，専ら《“絵の変換”と“枠の変換”(Ch.4)の関係》である。

6.1.2 “絵の変換”と“枠の変換”の関係の相対性

キャンパスである空間の比喻として，再び“電光掲示板”を持ち出すことにしよう。

電光掲示板 X の上の“絵の変換”は，どのように特定されるのか。それは，《最初オンになっている各電球 X を特定し，そして X に対応してつぎにオンになる電球 X' を特定する》という形でなされる。では，電球はどのように特定されるのか。電球の位置表現の枠を固定して，この枠に対して表現することによってである。

しかし，“枠を固定する”とはどのようにすることなのか。この問題は，数学の問題ではない。生活実践の問題である。

“枠の固定”を言うことが困難になる場面がある。実際，枠は手掛かりがなければ固定できない。空虚の中では，枠を固定できない。

枠は，手掛かりを用いて固定される。しかし，その手掛かりは固定されているのか。手掛かりは別の新たな手掛かりによって固定される他ない。

“絵の変換”は枠の固定を前提にして考えられる。この前提を疑うときどうなるか。“絵の変換”は，絵と枠の“相対的位置関係”——枠に対する絵の表現で規定される関係——の変化になる。そしてこのときには，“不動な枠 \mathcal{E} に対する絵の側の変化 $\mathcal{P} \rightarrow \mathcal{P}'$ ”なのか，“枠自体の変化 $\mathcal{E} \rightarrow \mathcal{E}'$ を含んでいる変化”（このときにはさらに，“絵も変換し枠も変換する”，“絵は不動で枠が変換する”の二つの場合が考えられる）なのか，その何れとも特定できない。

6.1.3 “枠の変換”で表現される“絵の変換”

絵と枠の関係の変化のうちには，“絵が不動であるのに対し枠の方が変わる”という読み方が可能であるようなものがある。

実際，枠 \mathcal{E} と絵 \mathcal{P} が与えられているとき，枠

\mathcal{E}' を新たに導入し、そして絵 \mathcal{P}' を条件 $\langle \mathcal{E}$ に対する \mathcal{P}' の関係は \mathcal{E}' に対する \mathcal{P} の関係に等しい \rangle を満たすようにつくれば、関係の二つの変化：

$$(\mathcal{E}, \mathcal{P}) \rightarrow (\mathcal{E}, \mathcal{P}')$$

$$(\mathcal{E}, \mathcal{P}) \rightarrow (\mathcal{E}', \mathcal{P})$$

(それぞれ、“枠 \mathcal{E} が不動で絵 \mathcal{P} が \mathcal{P}' に変わる”と“絵 \mathcal{P} が不動で枠 \mathcal{E} が \mathcal{E}' に変わる”) は、区別のつかないものになる。

6.2 線型変換

同一の線型空間上の線型写像を、線型変換と呼ぶ。線型写像の特殊としての線型変換は、“枠の線型変換”(Ch.4) に対するところの“絵の線型変換”である。

絵の線型変換も枠の線型変換も、座標変換：

$$(\xi_1, \dots, \xi_n) \mapsto (\eta_1, \dots, \eta_n);$$

$$\eta_i = \xi_1 \times \alpha_{i1} + \dots + \xi_n \times \alpha_{in} \quad (i=1, \dots, n)$$

の形に表現される。枠の線型変換の記述としての座標変換は、絵の線型変換の記述として読める。そして、絵の線型変換の記述としての座標変換は、その係数がつくる行列

$$\begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix}$$

の階数が線型空間の次元と同じであれば——これは、絵の線型変換が1対1であるための必要十分条件——枠の線型変換の記述として読める。

実際、座標変換

$$(\xi_1, \dots, \xi_n) \begin{pmatrix} \alpha_{11} & \dots & \alpha_{1n} \\ \dots & & \dots \\ \alpha_{n1} & \dots & \alpha_{nn} \end{pmatrix} = (\eta_1, \dots, \eta_n)$$

に対する“枠の変換”の読み方は、

(*) 《線型空間 (D, K) の二つの基底 $\{u_1, \dots, u_n\}$, $\{v_1, \dots, v_n\}$ に対し、

$$u_i = v_1 \times \alpha_{i1} + \dots + v_n \times \alpha_{in}$$

$$(i=1, \dots, n)$$

$$u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n \\ = v_{1 \times} \eta_1 + \dots + v_{n \times} \eta_n$$

“絵の変換”の読み方は、

(#) 《線型空間 (D, K) の基底 $\{u_1, \dots, u_n\}$

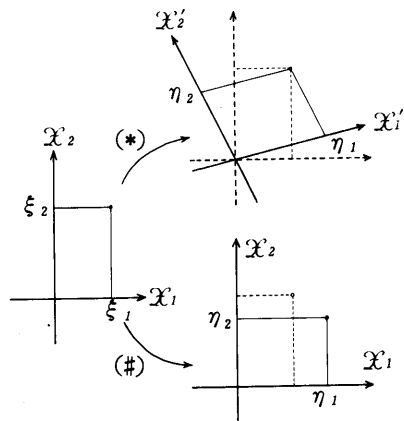
と線型変換(写像) $f: D \rightarrow D$ に対し、

$$f(u_i) = u_{1 \times} \alpha_{i1} + \dots + u_{n \times} \alpha_{in}$$

$$(i=1, \dots, n)$$

$$f(u_{1 \times} \xi_1 + \dots + u_{n \times} \xi_n)$$

$$= u_{1 \times} \eta_1 + \dots + u_{n \times} \eta_n$$



そこで“枠の変換”(*)は、

$$f(u_i) = u_{1 \times} \alpha_{i1} + \dots + u_{n \times} \alpha_{in}$$

$$(i=1, \dots, n)$$

で定義される線型変換(写像) f による“絵の変換”と区別できず、逆に、“絵の変換”(#)は、基底 $\{f(u_1), \dots, f(u_n)\}$ ——これが基底になるための条件が、“行列 (α_{ij}) の階数は空間の次元と一致する” ——を基底 $\{u_1, \dots, u_n\}$ に取り替える“枠の変換”と区別できない。

6.3 アフィン変換

同一のアフィン空間上のアフィン写像を、アフィン変換と呼ぶ。これは、(“枠のアフィン変換”に対する) “絵のアフィン変換”である。

絵の1対1アフィン変換の表現としての座標変換と、枠のアフィン変換としての座標変換は、それ自体では、区別できない。

実際、座標変換

$$\begin{aligned} (1 \xi_1 \cdots \xi_n) & \begin{pmatrix} 1 & \kappa_1 & \cdots & \kappa_n \\ 0 & \alpha_{11} & \cdots & \alpha_{1n} \\ & & \cdots & \\ 0 & \alpha_{n1} & \cdots & \alpha_{nn} \end{pmatrix} \\ & = (1 \eta_1 \cdots \eta_n) \end{aligned}$$

に対する“枠の変換”の読み方は、

$$\begin{aligned} & \langle \text{アフィン空間}(E, D, K) \text{の二つの枠}(O; u_1, \\ & \cdots, u_n), (O'; v_1, \cdots, v_n) \text{に対し,} \\ & O = O' + (v_1 \times \kappa_1 + \cdots + v_n \times \kappa_n) \\ & u_i = v_1 \times \alpha_{i1} + \cdots + v_n \times \alpha_{in} \\ & \quad (i = 1, \cdots, n) \\ & O_+(u_1 \times \xi_1 + \cdots + u_n \times \xi_n) \\ & = O' + (v_1 \times \eta_1 + \cdots + v_n \times \eta_n) \rangle \end{aligned}$$

“絵の変換”の読み方は、

$$\begin{aligned} & \langle \text{アフィン空間}(E, D, K) \text{の枠}(O; u_1, \cdots, u_n) \\ & \text{とアフィン変換(写像)} (F, f) : (E, D) \longrightarrow \\ & (E, D) \text{に対し,} \\ & F(O) = O_+(u_1 \times \kappa_1 + \cdots + u_n \times \kappa_n) \\ & f(u_i) = u_1 \times \alpha_{i1} + \cdots + u_n \times \alpha_{in} \\ & \quad (i = 1, \cdots, n) \\ & F(O_+(u_1 \times \xi_1 + \cdots + u_n \times \xi_n)) \\ & = O_+(u_1 \times \eta_1 + \cdots + u_n \times \eta_n) \rangle \end{aligned}$$

“絵の1対1アフィン変換”ないし“枠のアフィン変換”の把握が、座標変換を現前の事実としてこれから結論されるものであるとき、“絵の1対1アフィン変換”であるのか“枠のアフィン変換”であるのか、あるいは両者の混合であるのか、何れとも確定できない。こうしてわれわれは一つの相対性の中に住むことになる。